

海ぼたる

小川未明

青空文庫

ある日、兄弟は、村のはずれを流れている川にいつて、たくさんほたるを捕らえてきました。晩になって、かごに霧を吹いてやると、それはそれはよく光ったのであります。

いずれも小さな、黒い体をして、二つの赤い点が頭についていました。

「兄さん、よく光るね。」と、弟が、かごをのぞきながらいいますと、

「ああ、これがいちばんよく光るよ。」と、兄はかごの中で動いている、よく光るほたるを指さしながらいいました。

「兄さん、牛ぼたるなんだろう？」

「牛ぼたるかしらん。」

二人は、そういつて、目をみはっていました。牛ぼたるというのは、一種の大きなほたるでありました。それは、空に輝く、大きな青光りのする星を連想させるのであります。

その翌日でありました。

「晩になったら、また、川へいつて、牛ぼたるを捕つてこようね。」と、兄弟はいいました。

そのとき、二人の目には、水の清らかな、草の葉先がぬれて光る、しんとした、涼しい風の吹く川面の景色がありありとうかんだのであります。

ちようど昼ごろでありました。弟が、外から、だれか友だちに、

「海ほたる」だといって、一匹ひきの大きなほたるをもらってきま
した。

「兄にいさん、海ほたるうみというのを知しっている？」と、弟おとうとは兄にいにたず
ねました。

「知らない。」

兄あには、かつて、そんな名なのほたるを見みたことがありません。ま
た、聞きいたこともありません。

さつそく、兄あには、弟おとうとのそばにいつて、紙かみ袋ぶくろに包つつんだ海ほた
るをのぞいてみました。それは、普通ふつうのほたるよりも大おおきさが二
倍ばいもあつて、頭あたまには、二つの赤あかい点てんがついていましたが、色いろは、
ややうすかつたのであります。

「^{おお}大きなほたるだね。」と、^{あに}兄はいいました。あまり^{おお}大きいので、^{きみ}気味の悪い^{わる}ような^{かん}感じもされたのであります。

^{ふたり}二人は、^{ばん}晩には、^{ひか}どんなによく^{おも}光るだろうと思つて、^{うみ}海ぼたるをか^{なか}ごの中に入れて^いやりました。

「^{うみ}海ぼたるをもらつたよ。」と、^{きようだい}兄^{そと}弟は、^{とも}外に出て、^む友だちに向かつて^{はな}話しましたけれど、^{うみ}海ぼたるを知^しっているものがありませんでした。

まれに、その名^なだけを知^しつていまして、^み見たといつたものがありませんでした。もちろん、その^{うみ}海ぼたるについて、^{はなし}つぎのよ^{むかし}うな話のあることを^し知るものは、^{むすめ}ほとんどなかつたのであります。昔、^{うつく}あるところに、^{うつく}美しい、^{むすめ}おとなしい娘がありました。父^{ちち}や、

母は、どんなにその娘をかわいがったかしれません。やがて娘は、年ごろになつてお嫁にゆかなければならなくなりました。

両親は、どこか、いいところへやりたいものだと思つていました。それですから、方々からもらい手はありましたが、なかなか承知をいたしませんでした。

どこか、金持ちで、なに不自由なく暮らされて、娘をかわいがつてくれるような人のところへやりたいものだと考えていました。すると、あるとき、旅からわざわざ使いにやってきたものだと聞いて、男が、たずねてきました。そして、どうか、娘さんを、私どもの大尽の息子の嫁にもらいたいといつたのです。

両親は、けつして、相手を疑いませんでした。先方が、

かねも
金持ちで、なに不自由なく、そして、娘をかわいがってさえくれ
ればいいと思つていましたので、先方がそんなにいいところであ
るなら、娘もしあわせだからというので、ついやる気になりまし
た。

ただ、娘だけは、両親から、ひとり遠く離れてゆくのを悲
しみました。

「遠いといつて、あちらの山一つ越した先です。いつだつてこら
れないことはありません。」と、旅からきた男は、あちらの山を
指さしていました。

その山は、雲のように、淡く東の空にかかつて見られました。
「そんなに、泣かなくてもいい、三年たつたら私たちは、おまえ

のところにたずねてゆくから。」と、りようしん両親はいいました。

むすめ娘は、なみだ涙にぬれた目を上げて、ひがしほう東の方の山をながめていました
が、

「どうか、まいにち毎日、ばんがた晩方になりましたら、わたし私があやまの山のあちら
で、やはり、こちらを向むいてお父とうさんや、お母かあさんのことを、こい恋
しがっていると思おもつてください。」といいました。

これを聞きいて、父親ちちおやも、母親ははおやも、目めをぬらしたのでありま
す。

「なんで、おまえのことを片時かたときなりとも忘わすれるものではない。」
と答こたえました。

むすめ娘は、たびとうとう旅ひとの人につれられて、あちらの郷さとへお嫁よめにゆく

ことになったのであります。

娘がむすめいつてから、年をとつた父親や、母親は、毎日、東やまの山を見て娘のことを思つていました。けれど、娘からは、なんのたよりもなかつたのです。

娘は、まったく、旅の人にだまされたのであります。なるほ

ど、いつてみると、その家は、村の大尽であります。また、舅しゅうとめも、姑も、かわいがつてはくれましたけれど、舅むこといふ人は、すこし低能な生まれつきであることがわかりました。

彼女は、この愚かな舅が、たとえ自分を慕い、愛してくれましたにかかわらず、どうしても自分は愛することができなかつたのです。

娘は、西にそびえる高い山を仰ぎました。そして、明け暮れ、なつかしい故郷が慕われたのです。三年たてば、恋しい母や父が、やってくるといったけれど、彼女はどうしても、その日まで待つことはできませんでした。

「どうかして、生まれた家へ帰りたいもんだ。」と、彼女は思いました。

しかし、道は、遠く、ひとり歩いたのでは、方角すらも、よくわからないのであります。彼女はただわずかに、川に添うて歩いてきたことを思い出しました。どうかして、川ばたに出て、それについてゆこう。その後は、野にねたり、里に憩うたりして、路を聞きながらいったら、いつか故郷に帰れないこともあるま

いと思おもいました。

ある日ひ、娘むすめは、智むこや、家うちの人ひとたちに、気きづかれないように、ひそかに居いま間まから抜ぬけ出でたのであります。

川かわの流ながれているところまで、やつと落おちのびました。それから、その川かわについて、だんだんと上のぼってゆきました。女おんなの足あしで、道みちは、はかどりませんでした。草くさを分わけ、木きの下したをくぐったりして歩あるきました。いまにも、彼かの女じよは、追おっ手てのものがきはしないかと、心こころは急せぎました。どうかして、はやく、川かわをあちらへ渡わたって越こしたいものだと思おもいました。けれど、どこまでいっても、一つの橋はしもかかっているなかつたのです。

川かわ上かみには、どこかで大おお雨あめが降ふつたとみえて、水みずかさが増まし

ていました。やつと、日暮れ前に、一つの丸木橋を見いだしましたので、彼女かのじよは、喜んでその橋はしを渡わたりますと、木きが朽くちていたとみえて、橋はしが真まん中なかからぽつきり二つに折おれて、娘むすめは水みずの中なかにおぼれてしまいました。

「死しんでも、魂たましいだけは、故郷こきように帰かえりたい。」と、死しのまぎわまで、彼女かのじよは思おもっていました。

やがて、娘むすめの姿すがたは、水みずの面おもてに見みられなくなりました。すると、その夜よから、この川かわに、ほたるがで出て、水みずの流ながれに姿すがたを映うつしながら飛とんだのであります。

愚おろかな聾むこは、美うつくしい嫁よめをもらつて、どんなに喜よろこんでいたかしれません。そして、自分じぶんはできるだけ、やさしく彼女かのじよにしたつも

りでいました。それが、ふいに姿を隠してしまったので、また、いかばかり、悲しみ、歎いたであります。ついに聾は、家のひとたちが心配をして、見張りをしていたにもかかわらず、いつのまにか、家から飛び出して、同じ川に身を投げて死んでしまいました。

この水ぶくれのした死骸は、川の上に乗って、ふわりふわりと流れて、みんなの知らぬまに、海に入ってしまったのであります。不思議なことに、この死骸も、またほたるになったのです。

これが、海ほたるでありました。

二人の兄弟は、海ほたるについて、こんな物語があることを知りませんでした。

ただ、大きいから、かごの中に入れて、よく光るだろうと思つていました。

晩になると、海ほたるはよく光りました。川のほたるも負けずによく光りました。

「みんな、よく光るね。」と、兄と弟は、喜んでいいました。

あくる日の晩は、あまり両方とも、前夜のようによく光りませんでしたが、自然を家として、川の上や、空を飛んでいるものを、狭いかごの中にいれたせいでもありません。ほたるは、だんだん弱つて、日ごとに、小さな川のほたるから、一匹、二匹と死んでゆきました。そして、最後に海ほたるだけがかごの中に残りしました。しかし、その光も、だんだん衰えていつて、なんと

なくひとりいるのがさびしそうであります。

ある朝、二人は、この大きなほたるも死んでい
るのを見いだしました。そのときすでに、じめじめした梅雨が過ぎて、空は、ま
ぶしく輝いていたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「赤い鳥」

1923（大正12）年8月

※表題は底本では、「海《うみ》ぼたる」となっています。

※初出時の表題は「海螢」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海ぼたる

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>